（第三種郵便物認可）　平成２０年（2008年）８月１８日　（月曜日）　鉄鋼新聞

建築鋼材加工に特化

松山鋼材

松山鋼材（本社・千葉県旭市飯岡、社長・向後賢司氏）は、胴縁（壁材を取り付ける下地材）の二次加工や一般鋼材の一次加工など建築向けの鋼材加工事業を軸に営業展開している。太平洋を望む千葉県東部に位置しながらも、建築用鋼材全般に対応した生産体制を確立し、県内から全国に商圏を広げている。県内2カ所の工場を訪れ、「安心できる製品」づくりの現場を見た。

（中野　裕介）

胴縁に特化した塙工場

「東洋のドーバー」の異名をもつ、断崖絶壁が連なる房総半島の東端、千葉県旭市。その海岸線と目と鼻の先に本社工場（同）はある。敷地面積は2千平方㍍。形鋼や鋼管など建築現場で使う一般鋼材の一次加工をメーンに穴明けから切断、開先に至るH形鋼の一次加工ラインのほか、ビームワーカーやバンドソー、複合機、アイアンワーカーなど多種多様な加工設備を揃えている。

胴縁自動積算システムを無料提供

ネット活用、顧客を拡大

向後社長

昨年末には、プラズマ3次元加工機を1基新設。夜間は自動操業にするなどし、胴縁の母材加工に対応している。上部には、一般形鋼を保管する専用ラックを作製。限られた建屋の空間を最大限活用する工夫を凝らしている。

本社工場と並び、松山鋼材の鋼材加工業の両輪を担う第2の生産拠点、塙工場（旭市三川）。本社工場から北西に広がる田園地帯の一角に建屋を構える。

胴縁に特化した専用ライン3基を設けて、同製品の二次加工を手掛ける。5年前には自社ブランド「みけどうぶち」を商標登録。月産500㌧程度の胴縁を生産している。

一般鋼材の一次加工と胴縁の二次加工。加工段階と品種に応じて生産機能を分担することで、効率的な供給体制を整備している。年産約1万8千㌧を加工し、関東を中心に建設会社や商社、特約店に販売している。

「これまではハード面の強化が中心だったが、これからは『新しいものづくり』の観点に立ったソフト面に照準を合わせたい」と向後社長。昨年末までに塙工場に隣接する2万平方㍍を取得。工場の拡張などを視野に入れながら、次なる事業のアイデアを練る。

２００５年には自社のホームページ（HP）上に、CADを使った胴縁の自動積算システムを構築。無料でサービスの提供を始めた。利便性の高さが評判を呼び、今年初めまでに利用登録が１００件近くに伸長している。

幅広い加工機能をもつことで、鋼材二次流通業における市場競争力をアップ。「お客さんあっての会社」との向後社長の言葉を着実に具現化することで、ユーザーの利便性を高めている。

会社設立は１９６５年（昭40）。当初は県内の地場特約店向けに一般鋼材を販売していた。一方、大規模な物流機能をもつ浦安鉄鋼団地を抱える千葉県の建材市場ゆえ、鋼材二次流通業界での生き残りには、独自性の追求が不可欠だった。そこで20年ほど前進出したのが、今では看板事業の「鋼材加工」だった。

顧客ニーズに応じて年々加工機能の規模は拡充する一方で、向後社長は「数㌧の小口で短納期の受注」の重要性を強調する。どんな大きな建築物件であれ、急を要する3㌧、5㌧の加工案件の積み重ねが安定操業につながるとの考えからだ。

速く、正確に。それに加えて「安心」を届ける。向後社長は加工、物流両面で品質管理の徹底を訴える。今年2月には、鋼材加工の作業工程を管理する電子システムを導入。納期や設計内容などに変更が生じた場合でも、柔軟に対応できる仕組みを立ち上げた。最終的には、顧客が自社のホームページから専用ウエブに接続すると加工の進ちょく状況を閲覧できるメニューを加える考えだ。

立地的不利を解消しながら「強み」に磨きをかける。顧客の声をヒントにソフト、ハード両面で、松山鋼材の挑戦は続く。